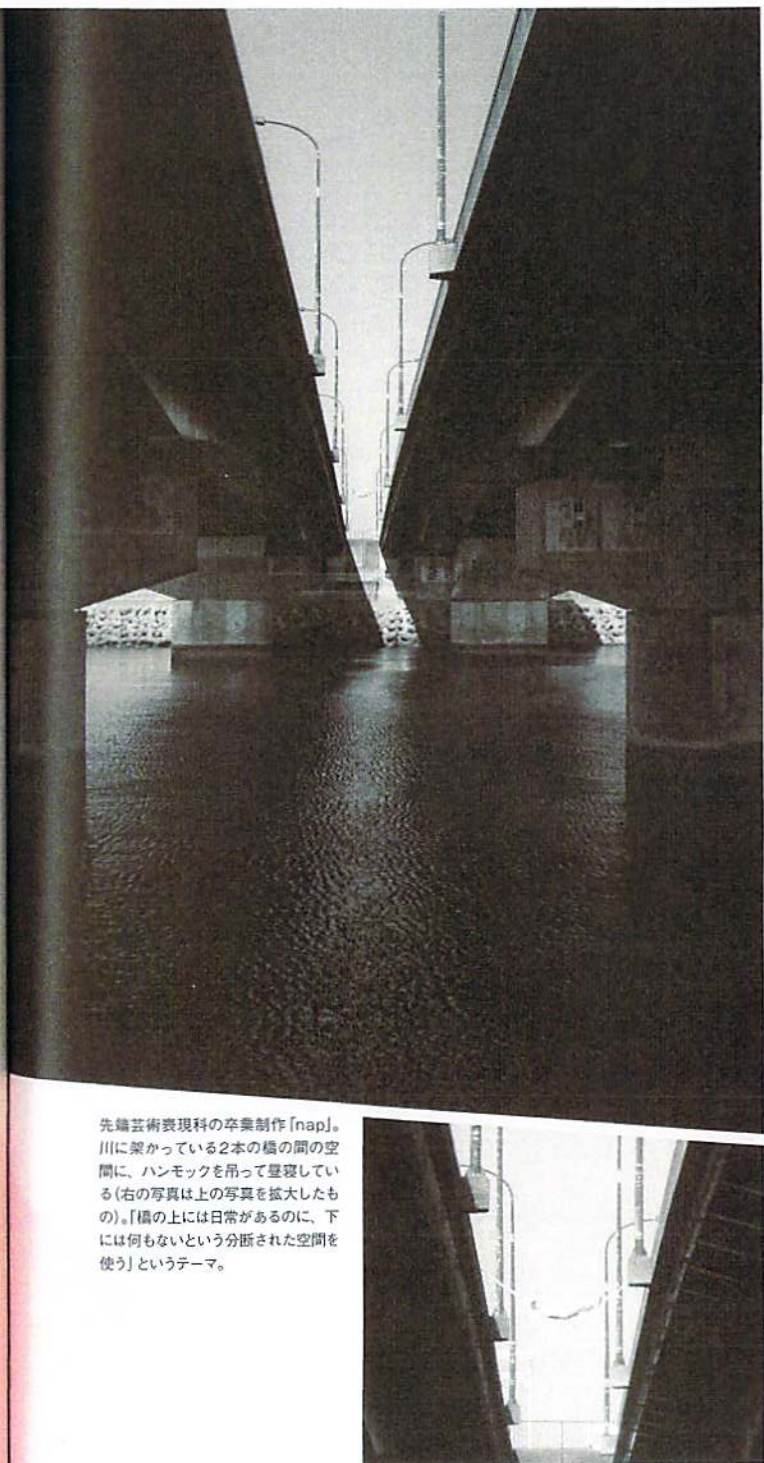


菊地良太

景色に入り込むことで、構造物を再認識してもらおう

きくちりょうた
1981年生まれ。10代の頃より始めたクライミングの技術を活かし、風景の新しい見方や探し方を取り入れ、写真や映像作品を制作する。高校卒業後、10年間、アウトドアショップ店員やクライミングのフリーカメラマンを経験した後、東京藝術大学に入学した。2014年、美術学部先端芸術表現科を卒業。



先端芸術表現科の卒業制作「nap」。川に架かっている2本の橋の間の空間に、ハンモックを吊って昼寝している(右の写真は上の写真を拡大したもの)。「橋の上には日常があるのに、下には何もない」という分断された空間を使う」というテーマ。

クライミングと美術の接点

菊地さんの作品は、公共空間の風景の人工物に登って、自分の姿を含めて撮影するというもの。こんなところに人が登っているなんて、と一見信じ難いものもある。

非常に興味を惹かれる作品ですが、これはバフォーマンスということなのでしょうか？

■ いや、バフォーマンスという意識はないんです。クライミングをする場合、まず下見する。これはオブザベーションと言っているので、ここは登れそうだなとか、あそこに手が引く掛かるなとか、動きのラインを確認していくんですね。アフォーダンスと同じで、クライミングでも動きが限定されていくんです。

環境が動物に対して意味を与えるという「アフォーダンス」ですね。

■ この形の取っ手なら、人はどのようにドアを開けるか、みたいなことです。それを調べて、登る対象ではない人工物に、どうアプローチしていくのか。その結果、僕が入り込んでいる空間の風景を記録で残してみる、という感じですよ。写真か映像かは、動きに合わせてベストな表現手段を選んでいきます。美術の中でクライミングしているんですね(笑)。

丁寧に説明してくれる菊地さん。しかし未だに、クライミングと美術の結びつきがよくわからない……。

——いつ頃から美術の方向を考えたんですか？

■ 藝大を選んだのは、進路を考えたら高校2年生の頃です。兄が同じ美術の方向で受験をしていたのを見て、ああ、そういう道もあるんだと。それで藝大を選びました。その頃、部活動はワンダーフォーゲル部で、クライミングは始めていたんです。まだマニアックなスポーツだった時代です。近所の公民館にフリークライミングの練習用の壁があったので、自然の山ではなく、人工の壁から始まったんですね。——その頃から、クライミングと美術を組み合わせたように考えていたんですか？

■ いや、最初にめざしたのはデザイン科なんです。ところが、藝大のデザイン科は難しく、僕は5年浪人して結局、入れなかった。だから一度あきらめて、受験からフェードアウト。地元のアウトドアショップで働きながら、ときどき、まとまった休みをもらってクライミングに行く生活になりました。——一度は完全に藝大を断念したんですか。

■ クライミングの雑誌に写真を提供するフリーのカメラマンとして活動したり、そういう生活を何年もやってきましたね。たまたま、プロのクライマーとして大会に出たりする仲間に出まれて登っていたので、クライミングはある程度のレベルまで引張ってもらいました。ただ自分の動機は競技とか記録ではなくて、きれいな景色とか、シンブルなものだったんです。ですから、天気の良いときには岩場で昼寝してたり(笑)。そんなクライミングで培った見方を取り入れて、面白い、気持ちのいいものを紹介できたらいなと漠然と思っていたんです。そこから作品づくりになっていきました。

ここまで聞いて、ようやく菊地さんの言う「美術の中のクライミング」の糸口がつかめてきた。クライミングが身体に染みこんでいたからこそ、美術と結びつけることができたのだろう。

面接では、痛いところを突かれました

——どこで藝大受験に復帰したのでしょうか？

■ 受験をやめた後も、僕と同じ頃に浪人していた仲間と呼ばれて、藝祭とかには遊びに行っていた。彼らの卒業制作展を見に行ったとき、もう一度やりたいなと思いました。——それで勉強を再開するんですか。



■以前通っていた予備校でデッサンの授業を受けたら、相談に行きました。やりたいことは5年間で決まっていたんで、街中の空間に入り込んで、撮りためたポートフォリオを先端芸術表現科の方に提出して受験しました。それが28歳の時です。

—面接ではどんなことを聞かれましたか？

■クライミングがしたいのか、美術がしたいのか、と。痛いところを突かれました(笑)。質問も多方面からで、かなり難しかったと思います。僕は美術のために美術を勉強するのではなくて、ほかの物を美術に変換する視点が評価されたのかなと思います。

なるほど。確かにクライミングを美術にする視点はかなり独特だ。それにしても、藝大の面

学生同士、お互いに 全然理解できないこともある

—実際、学生生活はいかがでしたか？

■メチャメチャ面白かったです(笑)。僕は10年遅れて入っているんですが、年齢も気にせず、仲良くしてくれました。授業は、先生の活動を見たリとか、カメラや身体表現の授業で、すぐに自分の活動に結びつきそうにないものもいっぱいあるって感じですね。スーザン・ソングの翻訳者の木幡和枝先生がいらっしやって、いろいろな展覧会を見て、そのレポートを書く授業とか。そうした中で、学生それぞれが、自分のテーマを見つけていくんです。

—周りの仲間のテーマを見て、何か思うところはありましたか？

■うーん、同じ科でも、同じことをやっているわけではないので、お互いに全然理解できないとか、けっこう、あるんですよ(笑)。互いに全然理解できなくても、作品にかける情熱やプロセスは、仲間同士通じているのかもしれない。

接でもまっとうな質問はあるのだな……。

—3年の段階で研究室が分かれるんですよね。

■僕は日比野克彦さんの研究室に行って、好き勝手にやっていいよ、といわれました。どうしても専門的な方向に片寄ってしまうので、逆にニュートラルに、頭を柔らかくしてもらった感じですよ。

—だから、ひたすら練習するんです

—一つの作品を完成させるまで、時間はどれくらいかかりますか？

■長い作品だと1〜2年、登る対象物を見ている場合もあります。でも、それは日常の中でやっていることで、実際に思い立ってからの口ケハンはすごく短いです。もう一度確認するだけなんで。登っている時間は5分とか10分とか。

—早いですね！費用はかかるんですか？

■かかりません(笑)。ファミリーマートで、無印の白いTシャツを買っていいです。あまり意識のないブレインなものです。



—それを写真や映像として収めるわけですね。僕が構造物に入ることで物の大きさが分かったり、どうやってそこに入ったか、逆の道順を考えてもらう。僕が風景に対して、どうアプローチしたかを考えてもらうことで、構造物を再認識してもらうわけです。

—撮影する人は別にいるのですよね？

■映画でも、監督やカメラマン、役者がいますが、その規模が小さくなったという意識で



菊地さんのこれまでの作品、「curve」(写真右)、「born」(写真左)。いずれも人工物のある空間に自身が入り込むことで、構造物を再認識し、見慣れた風景の見方を変化させている。

しょうか。一連のプログラムの結果として、写真や映像ができています。

—実際、作品として売り買ひするものは写真ですが、初めて売れたのは映像作品でしたね。ただ基本的に、これでは食べていけない(笑)。僕はこの間まで、高校の非常勤講師やアウトドアショップの店員をかねもちでやっていました。ショップ店員は今も続けています。

—卒業後に美術だけで稼ぐのは、やはりなかなか厳しいところもあるようだ。ところで菊地さんの作品は、卒業制作も含め、ちょっと危なげな気がするが……。

—作品制作で、落ちたりしないんですか？

■いや、僕の中で無理なことや危険なことは、絶対にしません。作品をつくるには責任が生まれてくるので、死なないように鍛えます。ですから、ひたすら練習するんです。

—これからの作品づくりのご予定は？

■香川県三豊市の栗島で若手作家が創作活動を行う「栗島芸術家村2017」に参加して、栗島に数カ月滞在します。それからロンドンのオークションに僕の作品が出る予定もあるので、ちょっと楽しみです。ただ、フリークライミングをもう1回やらないと感覚が薄れてきてしまうので、そのうち時間を取って、純粹なクライミングをしてみたくなってきました。